

皇室と總持寺



268
512

019429-000-3

特15-84

皇室と總持寺

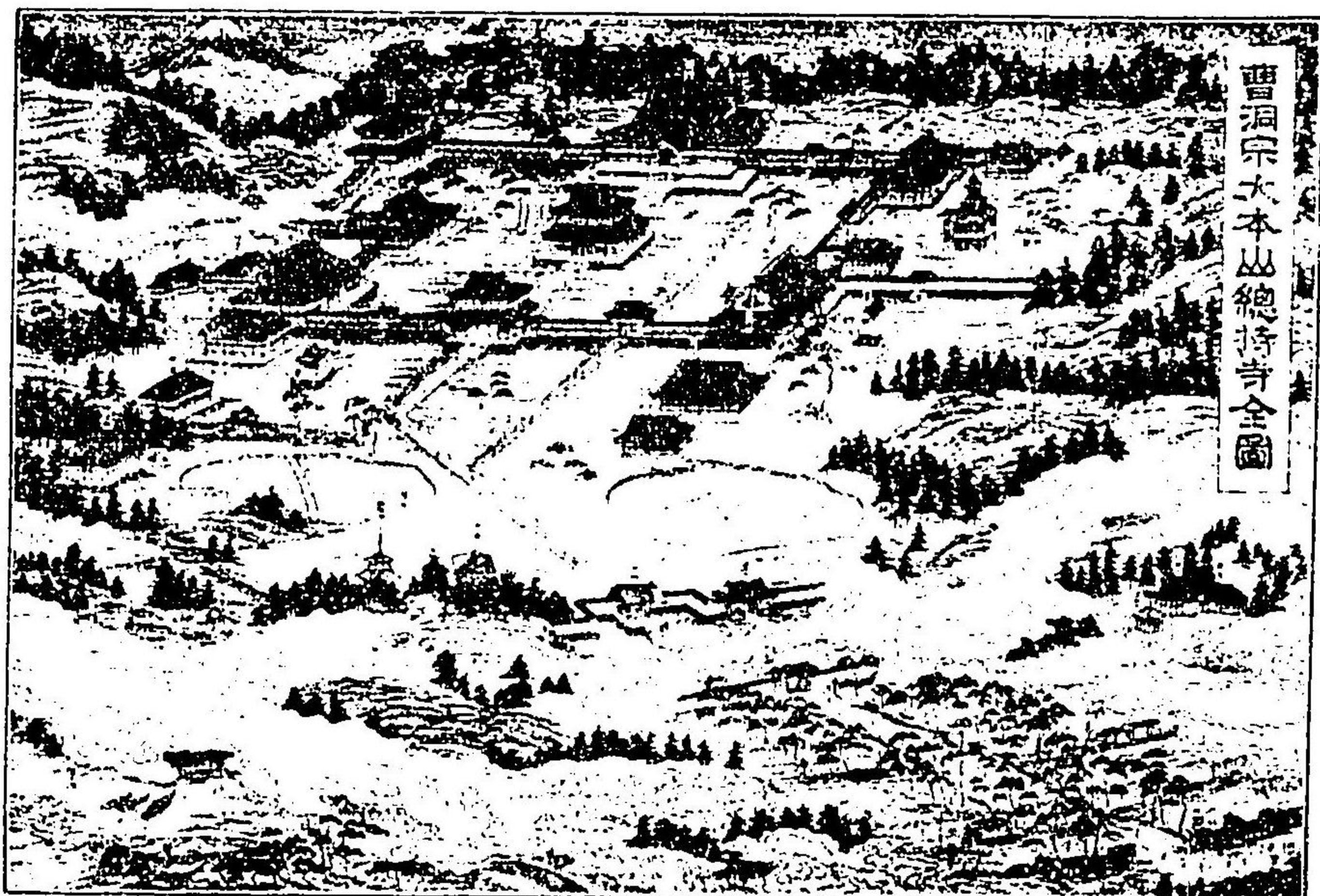
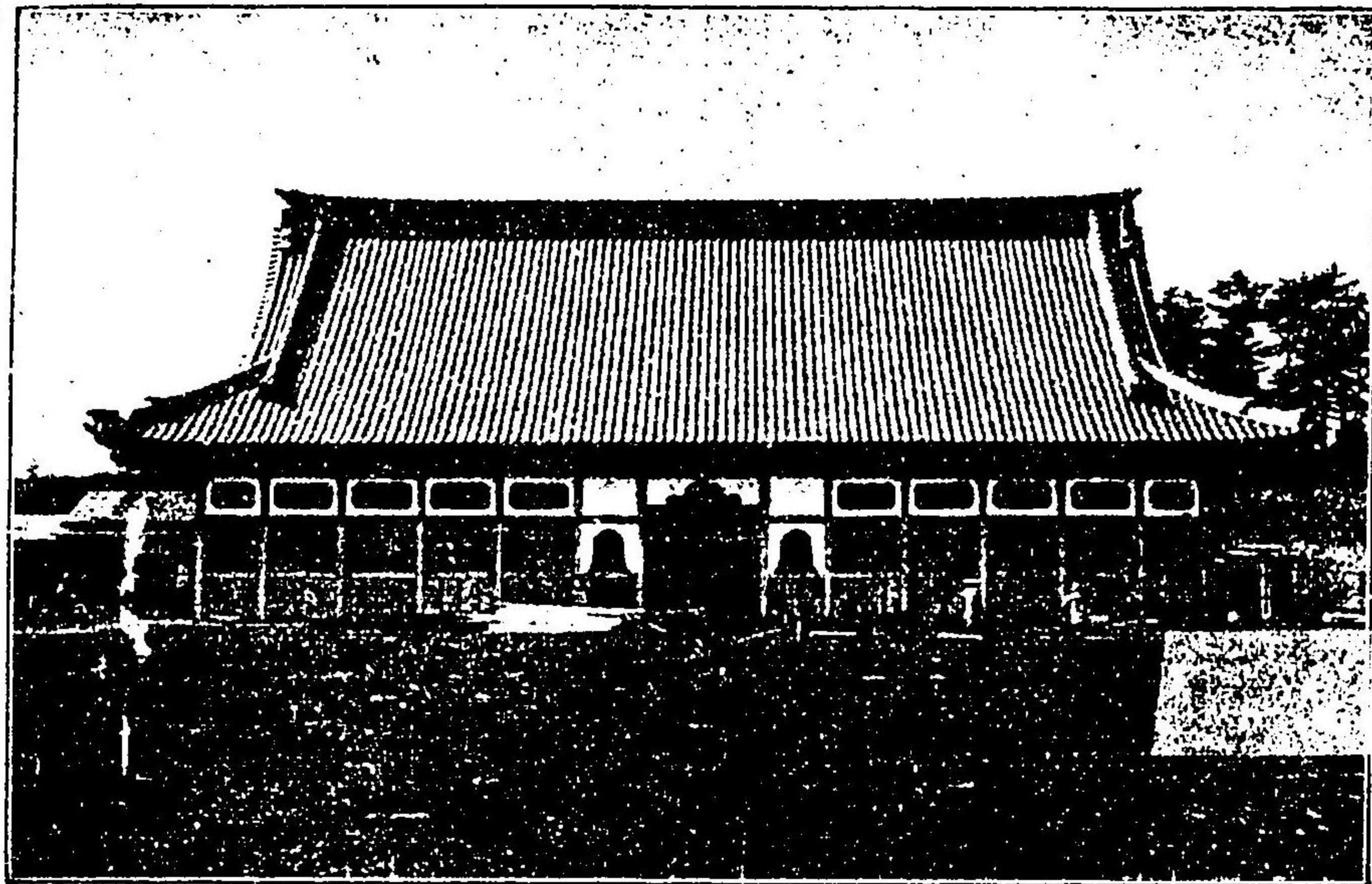
今村 延雄 / 編

M44. 11

ABG-0138



曹洞宗大本山總持寺光放堂の圖



皇室と總持寺

一、序言

曹洞宗大本山總持寺と云へば曹洞宗の太祖弘徳圓明國師常濟大師鑿山紹瑾禪師御開創の寺で、曹洞宗の大本山であることは、誰方も御承知の通りで、今更彼是と御話申す必要も無い位に存じます、併し又翻て考へて見ますと、我曹洞宗が何程日本の國家と深い關係を持て居るか、又曹洞宗と皇室との關係が何程親密であつて、代々の天子様から如何なる御歸依を受けて居たか、殊に總持寺が宗門に於ける位地は何程の程度であつたかと云ふ事に就ては、餘り承知して居ない人が無いとも限られないから、歴史上の参考ともなり、且つは我曹洞宗の日本に於ける勢力の如何、並に總持寺が日本佛教中に何んな位地を有つて居るかと云ふ事を明にする爲に少しばかり御話して見たいと思ひます。

二、常濟大師の略傳

44.11.16
 圖書

誰方も御承知の事ではあらうが、總持寺の開山は、瑩山紹瑾禪師と云ふ方である後に後村上天皇から佛慈禪師と云ふ諡を賜はり、また後桃園天皇から弘徳朝明國師と云ふ諡を賜りまして、尙ほ明治四十二年九月八日、今上陛下より、常濟大師の諡を賜はりましたので、今日では大日本國曹洞宗太祖大本山總持寺開山佛慈禪師弘徳朝明國師常濟大師瑩山紹瑾大和尚と申上げて居りますが、實は瑩山紹瑾和尚と申せば一般によく通ずる御名前て御座います、さて、紹瑾禪師即ち太祖大師は、御生國は越前の國多瀨邑で、嵯峨源氏の御裔でございます、母君が朝日を呑んだ夢を見られて、御懷妊遊ばした、それから後は、毎日村の觀音に參詣して三百三十三拜せられて、一方ならぬ厚き御信心を盡されたものであるから、禪師御誕生の折も誠に安々と御分娩遊ばされた、其時は丁度龜山天皇の文永五年十月八日の事ださうて御座います、母君はその後大師御養育の間にも恒に信心の心掛けを失はれなかつたが爲めに、二三歳の頃から大師も手を合せて南無くと稱へ給ひ五歳の頃には母君に伴はれて「觀音經」をお讀みになつたと云ふ事て御座ます、されば父母も深く感ぜられ

たるものと見えて、十三歳の四月八日に断然出家成さる事に相談せられ、永平寺に參られて高祖大師二代のお住持たる懷辨禪師のお弟子と成られ學問やら坐禪やらに少しも情り玉ふ事なく後懷辨禪師は其御弟子の徹通禪師に永平寺を御譲り遊ばされたゆゑ、又徹通禪師にも參ぜられ弘安八年正月、御歳十八歳にて永平寺を出て、彼方此方の善知識を尋ねられました、その中にも越前大野の寶慶寺に居らるゝ寂圓和尚に參得せられ、又京都萬壽寺の寶覺禪師に參ぜられ、其後叡山に登りて天台の學を學び、其れから弘安九年に紀州由良の法燈國師に參じて禪宗の深い道理を明められ、至る所に佛法の妙味を探られし許てはなく、何所にてても非常にその聰明なる事を稱讃せられ道がの善知識が舌を捲いて、讚歎せられたと云ふ事である、而しながら如何に諸方の叢林で、其の才能を稱讃せられましたも、當時我國の禪宗の有様を考へて見まするに、何分、まだ幼稚の時代であつて、是れならば大丈夫と云うて安心する程のお方は少かつた、それ故に一端辭せられたる永平寺の徹通禪師に、再び參得して眞實の悟を得たいと思ひ、復た永平寺へ歸られ、引續き加賀國の大乗寺

へ徹通禪師と共に移らせ給ひ、尙ほ修行に怠りなかつたが、此年偶々『法華經』を讀み玉ひて、父母所生眼悉見三千界と云一句に至り、今まで會得せられなかつた佛法の主旨を明かに悟り玉ひ、その旨を直に徹通禪師に申上げて、深く讚歎せられ、尙ほも辨道怠り玉はず或は日夜に參得し或は夜を日に繼いで一切經を拜讀せられ、遂に永仁二年の十月二十日に大悟せられ、翌年の正月十四日に徹通禪師より日本曹洞宗第四祖の位を受けられ、その後阿波國の郡司某と云ふ人の招待に依つて、城滿寺と云ふ寺の住持となられ、聽てまた徹通禪師よりのお召によりて大乘寺へ歸られ暫く徹通禪師を輔佐せられながら、時々禪師にかはりて説法せられた事もあり、またその間に『傳光錄』と云ふ五十三則の書籍をも著し玉ひて、日夜休む時も有られなかつたが、お齡三十五歳の時に、終に大乘寺の後席を繼ぎ玉ひ、峩山紹碩、明峯素哲等の諸禪師もこの時にお弟子となられたさうである、それから徹通禪師御遷化の後は加賀の淨住寺を可鐵鏡西堂と云ふ僧から寄附せられ、また滋野信直と云ふ人から能登の酒井の永光寺を寄附せられ、また能登の得田氏から光孝寺を寄附せられ

て、此四ヶ寺を恒に巡廻せられ、其間には種々な御化益も有つたさうである、然るにその頃能登國の鳳至郡に行基菩薩の開かれたる眞言宗の律院で諸嶽寺と云ふのがあつたが、その住職の定賢律師と云ふ方が深く大師の徳に歸依し、元亨元年の六月八日に、眞言宗を改めて曹洞宗の道場となし、名を總持寺と改められ、開堂の式も嚴に行はれました、その後醍醐天皇からは孤峯覺明と云ふ方を使僧として十種の疑問をお下しに相成り、大師は一々お答へになつた所から、天皇歡感斜ならず、特に勅使を下されて、紫衣勅額を賜ひ、總持寺を官寺たらしめ、尙ほ亦曹洞宗出世の道場と云ふ特別なる御恩命を蒙りて、門風益々盛んとなり、從ひ來る弟子等も、日々夜々少からぬ數であつたが、聽て淨住寺をば無涯智洪禪師に譲り光孝寺は壺庵至閑禪師に譲り、總持寺は峨山紹碩禪師に譲られて、お弟子の明峰素哲禪師を連れ、酒井の永光寺へ御退隱遊ばされたが、正中二年八月八日に永光寺を明峰禪師に譲られて、偕て御臨終の儀式として『八大人覺』を説かせられ、其月十五日夜半に至りて、俄に大衆を集め、遺偈を示されて、眠るが如くに御遷化遊ばされた、それより

其月二十五日に茶毘し上り、お舍利は大乗寺、永光寺、淨住寺、總持寺の四箇所に各々鄭重に分ち葬られました。が御遺徳を慕ひ奉るもの甚だ多く道俗何れも哀惜し奉らぬものはなかつたさうで御座います、さればその御遺徳は後世に至りて益々發揚し、曹洞宗の教を受くるもの、誰れ一人として太祖大師の御恩の程を思はぬものは御座りませぬ。

三、後醍醐天皇と太祖大師

前に鳥渡後醍醐天皇から太祖大師へ御恩命のあつた事を申しておきました。が實にこの御恩命は我曹洞宗にとりて皇室との關係上著しいとてありますから、少しく委しいお話を致したいと思ひます、熟ら考へて見まするに、後醍醐天皇は建武中興の偉業を大成せられたる、古今屈指の明君であつて、その御一生は殆んど兵馬倥傯の間に馳驅せられたと云ふ程にも係らず、佛教を信する念は甚だ深くあらせ玉ひ、臨濟の諸名僧、例へば妙心寺の開山たる無相大師及び大徳寺の開山たる大燈國師と云ふ様な諸名僧を尊敬したまひて、佛教に關する種々の道理を御尋遊ばした、その

中でも紀州の由良の法燈國師のお弟子たる、覺明禪師に深く歸依せられたが、この覺明禪師と云ふ方は、後醍醐天皇が北條高時に流調され玉ひて伯耆國に暫く御駐まり遊ばされし時に始めて謁見せられ、その時より深く天皇の歸依を受けたる高德の御方で有つて後に國濟國師の號を賜はり、又後村上天皇から三光國師の號を賜うて禪宗中では有名なる高僧であつたのである、然るに、その覺明禪師が太祖大師と淺からぬ因縁があつた、永光寺の於て種々問答が有りたる末、太祖大師の思召に依りて、出雲國に赴かれたと云ふ程の關係があつた所から、天皇に向つて太祖大師の高德なる事を上奏せられたるものと見えて、終に覺明和尚を勅使として前申した十種の疑問を太祖大師の許にお遣はしになつた、之れは元享元年八月の事である、そこで、大師は何の御思案もなく、すら／＼と答へ遊ばした、今此處て其の十種の疑問の講釋も致したいが、前の總持寺貫首現下が「十種疑問落草談」と云書籍をお著になつてありますから縁あるお方は其れを見て頂く事として、たゞその疑問の十條だけを御覽に入れて置きましやう。

勅問一曰、祖意教意是同是別耶

勅問二曰、達磨是香至國第三子而四大五蘊具足身也依何乘一葦蘆耶

勅問三曰、禪家所謂不立文字教外別傳矣雖然一大藏經皆是文字禪家語錄亦是文字若無文字佛祖言教依何流布末世耶

勅問四曰、有曰此身四大假合也命終之時地大歸地水火大歸水火風大歸風然則有何物墮地獄耶

勅問五曰、人皆爲先考先妣雖備靈供一獻茶湯少許無消不知受供否

勅問六曰、世尊於雪嶺六載修行明星現時忽然大悟曰我與大地有情非情同時成道矣悟人最可成道迷人依何成道

勅問七曰、金剛經曰一切諸佛及諸佛阿耨多羅三藐三菩提法皆從此經出矣金剛經是釋迦佛所說也然曰一切諸佛從此經出不知此經爲先耶諸佛爲先耶

勅問八曰、經曰大通智勝佛十劫坐道場佛法不現前不得成佛道云々今時人一生坐禪修行而如何成佛道耶

勅問九曰、經曰清淨行者不入涅槃破戒比丘不入地獄矣清淨行者可入涅槃爲什麼不入破戒比丘可入地獄爲什麼不入

勅問十曰、朕以趙州無公案提撕年尙矣以未透徹爲恨如何工夫用心耶

斯様な疑問を後醍醐天皇から下しに成りて、其答案を求めらるゝと云ふ例は他の宗旨に於て殆んど無い事である、殊に能登の山奥の邊鄙な所にお住ひなされた大師に向つて特に勅使をもつて、御下問なされると云ふ事は、如何に大師の徳が高く居らせられたと云ふ事が推察出来るのである、乃て、後醍醐天皇には大師の奉答が深く思召に契つたと見えて、更に勅使を以て紫衣を賜ひ、且つ總持寺と云ふ勅額をも賜ひて、從來何の位もなかつた總持寺を官寺の地位に上らしめ、その翌年には皇后陛下が御懷妊について、總持寺の放光菩薩に御祈禱あるやうにとの御思召があつた處、幸に、靈驗著かつた故、其年即ち元亨二年八月二十八日に、御綸旨を賜はり、總持寺を日本曹洞の本山、賜紫出世の道場と定め玉ひ、日本に又と並びなき格式高き大本山と御定めになりました、其時の御綸旨は、實に曹洞宗に出世道場の名の出來

た嚙矢であるから、左に書いて御目に掛けます。

能州諸嶽山總持禪寺者直續曹溪之正脈一專振洞上玄風一特依爲日域無雙之禪苑一補任曹洞出世之道場一宜相並南禪第一之上刹一着紫衣法服一奉祈實祚延長一者天氣如レ此仍執達如レ件

元亨二年八月二十八日

瑩山紹瑾和尚禪室

經 題

「特に日域無雙の禪苑たるに依つて曹洞出世の道場に補任す」とあるは、他に餘り例を見ない事で、畢竟天皇陛下が總持寺は日本一の寺であると仰せられた事であるが、そののみならず、南禪上刹と相並んで紫衣法服を着けよとの仰事は、殆んど佛教各宗中に比類稀なる事である、何故かと云ふに、禪宗が京都や鎌倉で盛大を極めて居た諸山の其上に越して一層重んぜられたのは南禪寺である、此寺は龜山天皇が普門無關禪師に歸依の餘り、離宮を喜捨して寺とせられたる舊跡で、天皇親ら佛子金剛眼と名られ、後には無關禪師は大明國師の謚を皇室から下されたといふ由緒あり

る寺で、終に諸山の上に位すべき寺であるとまで定められた名刹である、然るに、今總持寺を以て、其南禪寺と、同格の本山と心得よとの事であるから、曹洞宗にとりては此上もない榮譽であつて各宗間にも全く比類を見ないと云うたのは決して譽め過ぎた言葉では御座いませぬ、この御繪旨を頂戴してから曹洞宗は實際の宗風を立て、始めて日本の國に曹洞宗と云ふ一宗が首尾揃つた形となつて現れたもので、是れ偏に太祖大師の御盛徳に據るもので有りますから、支那より正傳の佛法を傳來せられたる我宗高祖承陽大師の御恩を思ふに付けても深く太祖大師の御恩の程を思はなければならぬ事と思ひます。

四、皇室と總持寺との關係

後醍醐天皇の太祖大師に歸依したまひたる事は斯くの如くて御座いますが、獨り後醍醐天皇の歸依厚かりしばかりではなく、總持寺は歴代の天皇陛下と少からぬ關係を有つて居りました、現に後村上天皇の如きは、後醍醐天皇と同じく兵馬の間に御奔走遊ばされた御身で有りながら、矢張佛法の信仰は少しも替らせられず、三光國

師も宮中に入りて皇后皇太子の爲めに授戒までした事があると云ふ事であるから、従つて、太祖大師の大徳をも御追慕あらせられ、正平九年三月二日に佛慈禪師と云ふ諡を賜りてその徳を頌せられ、尙ほ其年十月三日、更らに繪旨を賜りました、この御繪旨は先帝後醍醐天皇の御繪旨と殆んど同意味の事ではありますが、左に書いて御覽に入れます。

勅宣、能州總持寺住持職位之事

緬傳ニ驚嶺之正脈ニ直匡ニ曹洞之勝躅ニ祖位齊ニ瑞龍ニ宗綱振ニ天下ニ恢弘祖道ニ擧ニ揚佛法ニ鎮奉ニ祈ニ皇圖長久於萬春千秋ニ益々令ニ榮ニ少林芬芳於一華五葉ニ者天氣如レ此仍執達如レ件

正平九年甲午十月三日

行 房

總持寺住持禪室

此中に瑞龍とあるのは南禪寺の事で、少林とあるのは達磨大師の事で御座います、即ち先帝の御繪旨と同様の御恩命と思へば宜しいので御座います、借てそれから後

は別段騒がしき事もなく至極平穩に打過ぎましたが、其間には總持寺の法孫が澤山全國へ瀾漫りまして、一萬ヶ寺以上の寺が彼方此方に起つたさうで其爲めに少しく紛紜を生じた事もあつて、其時に後奈良天皇から天文九年二月二十五日に一通の御繪旨を賜り、益々本山の出世道場たる事を明にせられました、其後後陽成天皇の時に至りまして總持寺の本山たる性格を明かにする爲めにまた左の如き繪旨を賜はつたのである。

依、爲能州風氣至郡櫛比庄諸嶽山總持寺者曹洞之本寺ニ被補ニ出世之地ニ異ニ于他ニ者也彌蒙ニ勅宣ニ可令ニ出世ニ若老僧勞侶不叶ニ上洛ニ之輩者於當山ニ可令成ニ轉衣ニ者天氣所候也仍執達如件

天正十七年六月二十六日

左 少 辨 判

總 持 寺

「出世の地に補せられ他に異なるものなり」との御恩命は當本山の特質を示されたもので、特に「老僧勞侶上洛叶はざるの輩は當山に於て轉衣せしむべきものなり」

との仰せの如きは、格段なる寛典であつて、吾宗の爲に少なからざる特旨を賜ひたるものである、元來轉衣と云ふ事は我が宗の僧侶が色衣を着用する資格を得る爲めに行ふ出世の儀式であつて、本山に於て一夜住職の式を終へ直ぐに京都に登りて勸修寺家の紹介により參内して、始めて出世の證を受ける事に成つて居たので、當時に在つては非常なる重い儀式であつた、それを參内する力のないものは本山に於て式を濟ませても可いと云ふ特典を賜はつたのは、吾が本山に對して如何に手厚き思召があつたかと云ふ事が明ります、然るに是より先き正親町天皇の元龜元年に後醍醐天皇後村上天皇後奈良天皇の三朝の御繪旨は不幸にして兵火の爲めに灰燼に歸した、仍て即時に執奏家より其の謄寫を下されたが、其後後陽成天皇の朝に至り、先きの御繪旨を賜りたることである、そうして正保二年後光明天皇の朝に更に又御繪旨を御下しになつた、此繪旨は唯、後醍醐、後村上、後奈良の三朝天皇より下賜せられた御繪旨が元龜元年に焼失したけれども、總持寺が、曹洞宗の本山たる事は少しも疑ふべからざるものであると云ふ證據の爲めに下賜せられたるものであつて云

は、三朝天皇の御繪旨の證明と云うても宜しいやうなものである、その全文を左に掲げて御覽に入れましやう。

能登國總持禪寺者爲、異于他勅願所被補曹洞出世之道場、相並南禪第一上刹、可着紫衣法服、之旨雖被成、後醍醐院勅裁、依前年國中兵亂、伽藍僧房悉回祿之時、同令燒失、之由一宗之僧徒悲嘆之奏狀被聞、食訖且又元和中守武家之下知、可任先規者也、彌專正法之興繁、宜奉禱天下泰平海内安全者、依天氣、執達如件

正保二年四月二十九日

右少辨判

この繪旨の事を本山では繼繪旨と申す、即ち同意味の事を繼續して下されたから有るが、此なかに前年國中兵亂と云ふものは元龜元年の事で、回祿と云ふのは焼失の事であり、以上を五朝天皇の御繪旨と申すのである、其後桃園天皇の安永元年に太祖大師四百五十回の大遠忌に際し、特に弘徳圓明國師の諡號を賜ひ、もつて其徳を頌せられました、之が我宗に於て國師號を賜はりたる最初ださうて御座い

ます其御宸翰の御文書を左に御眼に掛けます。

勅 佛慈禪師人天宗師佛祖嫡嗣奏對十事叡問爲賜紫出世道場感得一夢勝因
現ニ放光動地祥瑞ニ開ニ法門於四處ニ振ニ德化於八紘ニ身嘗雖ニ没ニ竹塢白雲之室ニ經ニ悠
遠ニ名今得ニ達ニ楓宸青鎖之闈ニ來ニ永慕ニ苟思ニ彼德ニ如ニ遇ニ其入ニ因證ニ弘德圓明國師ニ

安永元年十一月二十九日

簡單ながら、誠に大師の御聖徳を顯はされたる貴い勅語で御座います、然るに其安
永元年より百三十八年を経て、明治四十二年に至り、今上天皇陛下は、深く大師の
徳を憶念し玉ひ、其年九月八日を以て、特に常濟大師の號を御宣下に相成りました、
其御宣旨の寫しは前に掲げてある通りで御座います、抑々我國には、佛教各宗中々
盛てはありますが、一宗の開祖と崇められる祖師方でも、皇室から何の御沙汰も受
けられぬ方も數ある中に斯くも前後五朝の天皇から優渥なる御綸旨を賜はり、且つ
三代の天皇から勅號を賜はつたのは他の諸宗に於て、餘り多く見ない例である、其
れも總持寺が京都とか、鎌倉とか云ふ如き都にあつて、其の御開山が皇族とか公卿

とか、または武家に關係が厚いとか云ふ因縁でもあるならば、其俗縁の方に依つて、
斯云ふ特典も得られぬ事もないでありませうが、身は能登の山奥にあらせられ、
俗系を申せば、皇族でもなく、公卿でもなく武家に阿諛うた事もなく越前の小さい
村から出世せられた太祖大師の盛徳のみによつて、斯くの如き御恩典を蒙ると云ふ
は何たる貴い事であるか、加之明治の代になつてから、輪番交代を廢し獨住とせ
られてより、總持寺貫首には、勅號を下賜せらるゝこととなり、今の貫首猥下まで
四代の間、常に朝廷から、此御恩命を下さるゝこととなりました、私共は此關係を考
へて見まして、我曹洞宗の各宗門に超越えたる事を思ひ、我が宗と皇室との關係の
厚い事を思はなければなりませぬが之れと申すも、偏に太祖大師の御徳の高く我々
を御慈濟遊ばされた御恩の厚さに據ると思へば只管感泣する外は御座いませぬ。

五、大本山總持寺の移轉遷祖式

前より述べたる如く、皇室と最も關係深き大本山總持寺は、明治三十年四月十三日
に一大不幸に接した、それは、不圖したることより火災を起し、宏犬なる伽藍は一

朝にして烏有に歸したるのである、一宗の道俗は上下を擧げて驚愕と悲歎とを以て満たされたが、しかし禍を轉じて福となすは此時なりとし、移轉再建の事に決し、教化に最も便宜なる京濱の中間なる神奈川縣橋樹郡生見尾村の一勝地を卜し、移轉再建の事業は、上下賛同の下に着々進行し、本年七月二日を以て寺籍を能登の舊地より移し、本月本日（十一月五日）盛大なる移轉遷祖式を擧ぐるに至つた。嗚呼、焼失の不幸に接してより春風秋雨十五年、再建の事業は未だ完成したりと云ふにはあらざるも、こゝに太祖大師の眞儀を迎へ奉りて、報恩の誠を捧ぐるを得るは、吾曹法孫の歡喜に堪へざる所である。

惟ふに、太祖大師の流風餘韻は、此の新たなる根據地によりて、冥々の間に、皇運を扶翼し奉り、國家の隆盛を資助することに一層の効果を擧ぐることは信じて疑はざる所にして、また吾曹法孫は報恩の一分として努力せんことを期するのでござります。

皇室と總持寺終

附 總持寺移轉再建の事

上來述べた通り由緒の正しき大本山たる總持寺のことであれば、實に宗門の僧侶及檀信徒が大切にすべきばかりでなく、日本國の歴史上から云つても大切な寺院であります、然るに不幸なことには去る明治三十年四月十三日に不圖したことから火災を起し、山内一同總掛りて消防に手を盡されたけれども、何分宏大な伽藍のこと、少し位の人や、唧筒位ではトモ防ぐことが出來ず、輪奐の美を盡した宏大の殿堂が遂に全部焼失の不幸を見るに至りましたのは、宗内一同の悲嘆は申すまでもなく、日本國家の上から見ても實に遺憾千萬のことであり、が素より斯る大本山ではあり、末派は一萬四千餘ヶ寺もあり、檀信徒の數も幾百萬と云ふ大宗門であれば、是非とも速に再建致さんければならぬ、然るに其再建につき茲に一つ非常に大切な事は、總持寺は上來述べた如き由緒來歴あるに拘はらず從來は交通の最も不便なる能登の僻陬にあつた爲に、曹洞宗の檀信徒でありながら、其大本山たる總持寺の所在地すらも知らぬ位のもの往々にしてあるのみならず、自ら其本山に參拜し

て親しく太祖の遺徳を仰ぐと云ふものは誠に少いのであります、加之ならず本山と云ふは唯高祖太祖の御開創なされた寺と云ふだけのものではなくて、實に宗門の總ての活動の根本中樞となつて居るのでありますからして、其所在地の如何は直に宗門の活動に非常の關係を持つて居るのであります、夫に就て先年來本山移轉の議が彼此に起り、同じ費用を以て建てるならば、交通不便の地に置いて埋木同様にするよりも、便利よき而も社會總ての中心たる東京附近に移して、萬民の參拜に便を謀りて、成るべく多くの人に信佛の因縁を結ばしめると共に、全國布教の根本道場としたならば、是れ却て禍を轉じて福となすものだと論ずるもの多くありました、本山に於ても其議を探られ、明治三十九年七月を以て、末派の重なるものを集めて諮詢會を開かれ、滿場一致の賛成を得、又御直末壹百三十餘箇寺の評定にも附せられたが之れも最大多數を以て移轉を賛成し、夫々其實行法に就て御心配なされましたが、愈々官廳の許可を得て、移轉の議が決定され工事は着々進行し、二三の重なる建物は既に出來上り、移轉式を擧げらるゝまでに至りました、今その地景と

設計の主要を申し上げますと、神奈川縣武藏國橋本郡生見尾村即ち東海道の鶴見停車場から西の方へ三町程、松林が藪鬱と茂つてゐる處で、境内は參拾餘町歩餘の廣さである、北には二見臺、南には富士見臺の勝景を控へて其中央の竈のやうに奥深く入り込んだ所には池が三段になつて清冽な水が四時涸れずに湛へて居ります、さて其上の方に登り前面を見渡せば東京灣は鏡の如く、鶴見川は帯のやうに左より海に注ぎ、松林は白い砂の間に幾町となく打續き、又遙か彼方には房州や上總の山々が烟霧の間に出没し、一望眼の醒めるやうな景色であります、それから後を願れば、同じく松林の續きたる間に富士の高嶺は箱根其他の山を距て、雲間に聳え、前も後も口や筆に盡し難い、佳い景色でございます、此景色の佳い境内に大本山の建物が豫定の通り全部完成した曉の事を思ひ浮べて見ますと、先づ東海道の街道松並木の處から三十間の本山道路を入ると羯鼓林があり、其より一直線に三松關即ち富士見、二見の兩臺の對ひ會つた處を超えて勅門に到ると右の方に通用門がある、そこを入つて登ると千貳百歩で佛殿、又三百歩で太祖堂に達する、太祖堂の東には回廊

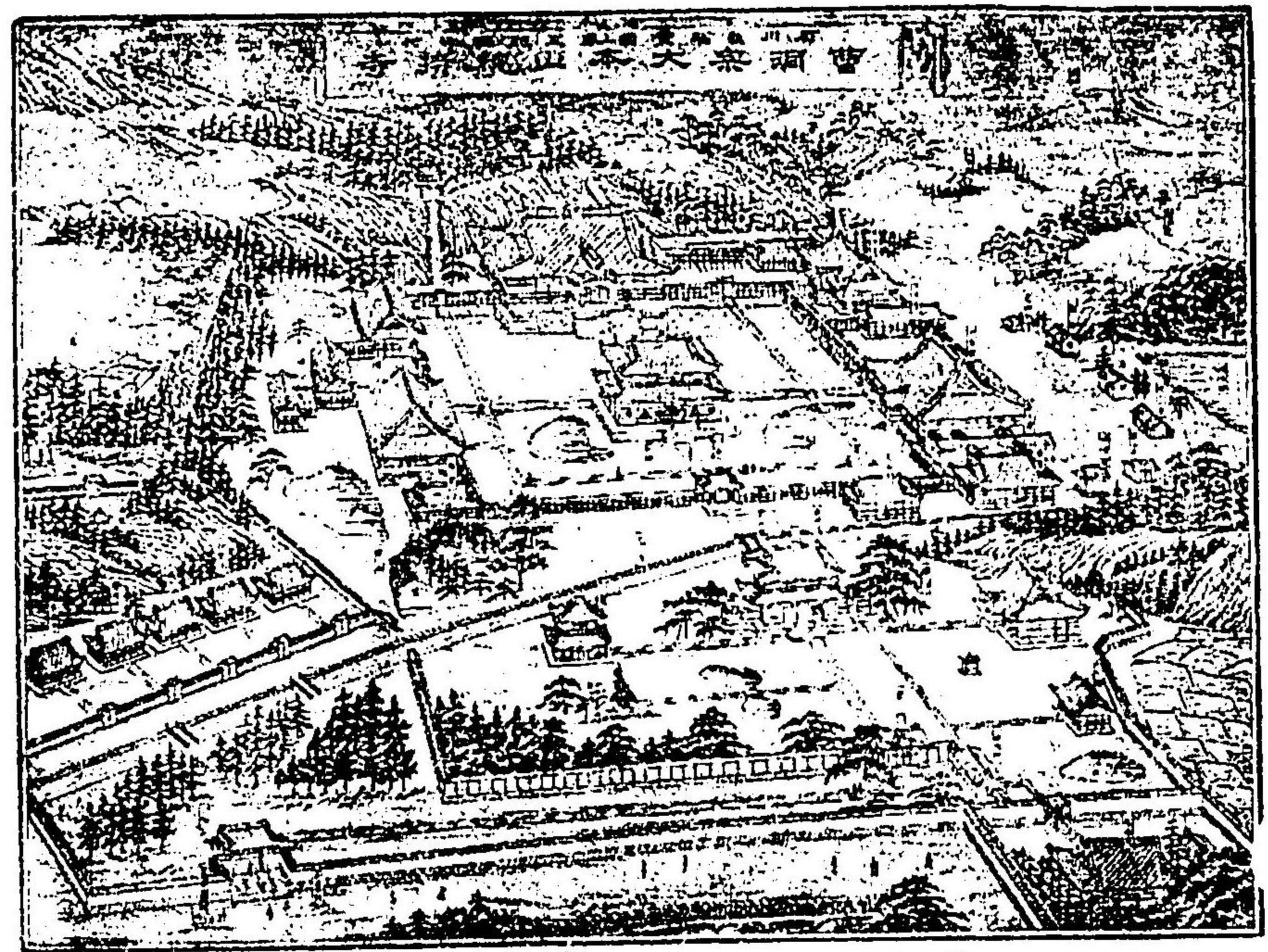
續きて、紫雲臺（貫首居間）墓沿齋且座閣（應接所）監院寮（執事寮）大庫裡、小庫裡、浴室と順に並んで、猶其蔭の方には貴賓館や、土藏、記録庫、米廩が見えます、更に西の方を見れば、傳燈院（開祖廟）は太祖堂より五百歩の上に建立せられ、東と同じく廟下續きの建物には放光堂、鐘樓、衆寮、東司（厠）接賓等があり、徐に山門の下に下れば、池水の清き邊には三寶殿（本山鎮守三寶荒神）、慈雲閣（觀音堂）經藏、護國塔（殉國志士の忠魂堂）等が富士見臺の中腹に立てらるゝ筈である、地形は佳し此大伽藍は東京附近に全く見るとの出来ぬ大本山たるに至るとであらうと快よき想像が浮んで來るとでございます、それに設計豫算は三百萬圓と云ふとであり、御本山に於ても竣工の曉には壹百人の僧侶方を安居せしめて佛祖正傳の坐禪を參究せしめ、布教教育の根本道場として、宗門の隆盛を圖り又檀信徒方の參拜せらるゝ靈場たらしむる、遠大の設計を以て着手せらるゝこととありますから、完成後の壯觀は、今から想像の及ばぬ所であらうと思はれます、併し斯く鶴見の方に御設計になりましたも、太祖大師の御舊跡は決して龜末には出来ませぬから前の總持

寺の地には別院を建立せられ永遠に靈地を保存せらるゝこととなりました。

熟々考へて見ますれば、我曹洞宗が今日の如く日本國中に瀾漫つて居るのは、偏へ太祖大師の御恩にあるので、若し太祖大師微りせば我々は何うして曹洞宗の難有教を斯くも安々と承ることが出来て、受戒入位發願利生の妙功德を積むことが出来ませうぞ、已に斯の如き好因縁あつて曹洞宗の檀信徒となつたからは、兼ねて御聞きなされた通りの行持報恩の心掛を專一として、太祖大師の御恩報謝を怠らず、其御開闢なされた大本山の維持を忘れず、此度の如き出来事に遇はれたときには速に應分の御入費を奉納して、宗門の益々榮え行くよう御盡力の程を願ひます、是れ決して太祖大師への御恩報謝であるばかりでなく、永平寺の御開山高祖承陽大師への追孝にもなり、且つは大恩教主釋迦牟尼佛の御恩にも報い奉る次第で、併せて總持寺の爲めに御聖慮を傾け給ひし歴代天皇陛下は申すまでもなく更に大師號を賜はりし今上天皇陛下の御思召にも合ふ次第でありますから、御再建の事業につきましては漸く二三の建物が出来たのみで、豫定通りに完成するには猶ほ多大の金額を

要することでありますから、宗門の檀信徒は勿論、苟くも佛教の難有さを信ぜらるゝ方々は、相互に精々御盡力ありますやう呉々も御願申します、南無大恩教主釋迦牟尼佛高祖承陽大師太祖常濟大師生々世々值遇頂戴。

總持寺移轉再建の事終



能登大國山本總持寺(前以失燒)畧圖

268
512

明治四十四年十一月二日印刷
 明治四十四年十一月廿日發行

編輯兼 東京市芝區露月町十八番地 今村延雄
 印刷人 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 太田音次郎
 印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 秀英舍

發行所 東京市芝區露月町十八番地 鴻盟社

電話二〇二七
 振替東京二九七九

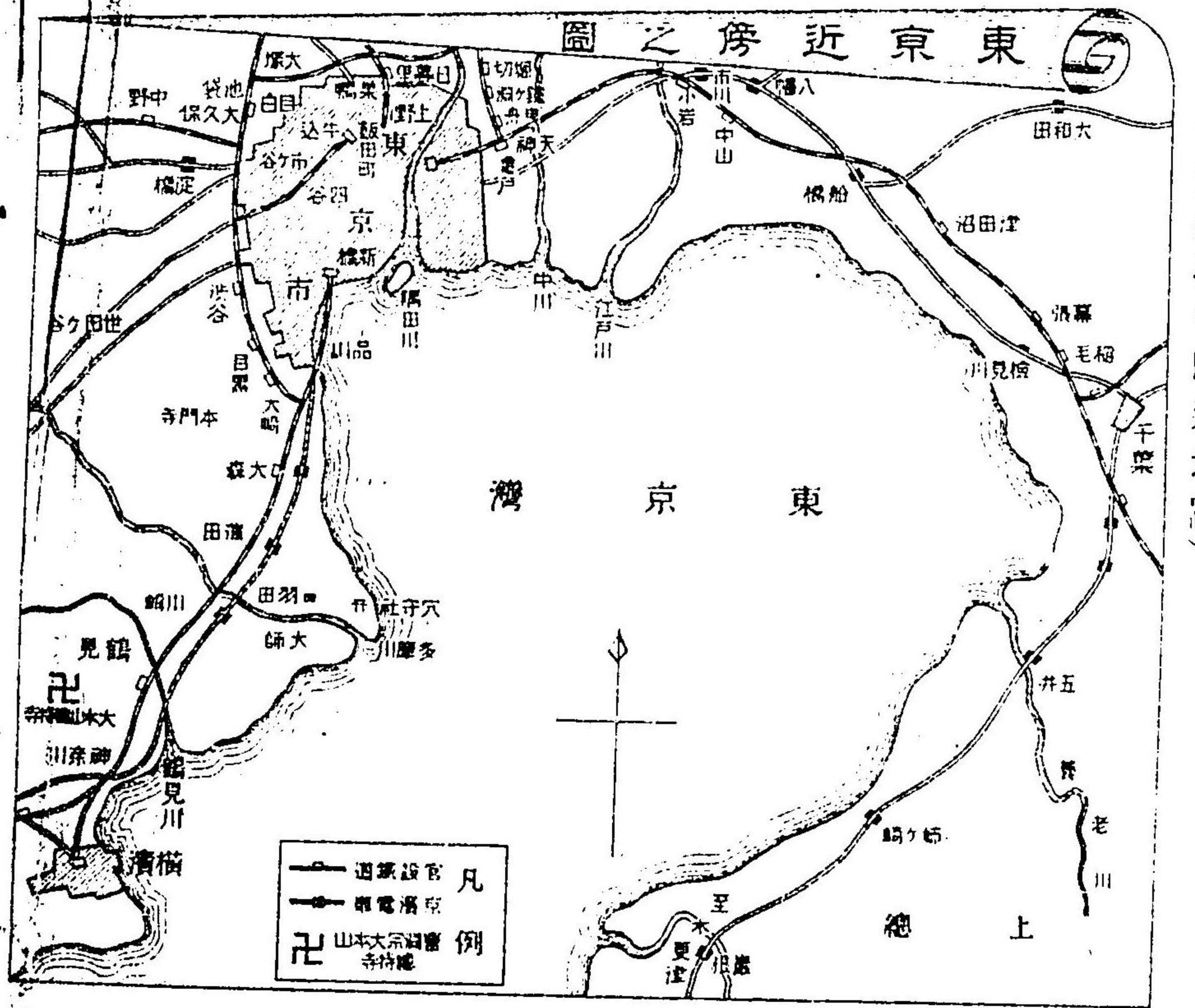
20-67

大本山總持寺移轉遷祖式

奉祝記念

東京府第壹第貳第參第肆

宗務所管内寺院印施



(大本山總持寺附近地圖)